

# 幕末期の下関戦争を描いた一〇枚の絵図

山崎一郎

## はじめに

本稿では、幕末、元治元年（一八六四）八月の下関戦争を描いた一〇枚の絵図を紹介し、あわせてそれらが作成された背景、絵図の史料的价值、伝来過程などを検討する。

対象とするのは、毛利家文庫 63馬関戦争一件 22「長州下ノ関ニ於テ英亜蘭戦争之始末書并絵図面共」に綴じられている絵図である。この冊子には下関戦争のようすを伝える書状、上申書、報告書などが書き写されており、全五九丁（絵図除く）、その巻末に絵図一〇枚が折り畳んだ状態で綴じられている。近年『山口県史 通史編 幕末維新』（二〇一九年）などで一部が使用された例があるが、史料自体に関する本格的な検討は、筆者が平成二十九年（二〇一七）度の当館アーカイブズウィーク「歴史小話」で取り上げたのみであろう。本稿はその後の調査成果も含め述べる。

下関戦争は、元治元年八月五日から英米仏蘭四ヶ国連合

艦隊が下関海峡の長州藩砲台を攻撃、占拠した事件である。教科書などでは「四国連合艦隊下関砲撃事件」とされ、そのほか「馬関戦争」とか、前年文久三年（一八六三）五月六月、長州藩の攘夷決行およびその後の米仏軍艦による報復攻撃と一連に捉えて「第六次下関戦争」と表記される場合もある（『下関市史』）。本稿では、『山口県史 通史編 幕末維新』にならない「下関戦争」と表記する。

下関戦争は、八月五日、四ヶ国艦隊による前田砲台砲撃に始まり、六日連合国の陸戦隊が上陸、前田砲台などを占領した。ベアトが撮影した有名な前田砲台占領風景の写真はこの時のものである。形勢は六日でほぼ決まったが、以後も継続的に戦闘は続いた。八日長州藩の講和使節が連合国に和議を申し入れ、数度の協議を経たのち、十四日に停戦協定が結ばれて戦争は終結した。

四ヶ国連合艦隊による軍事行動は、前年文久三年五月十

日の長州藩の攘夷決行、米・仏・蘭船への攻撃に対する報復という側面も有したが、むしろ各国の大きな意図は、当時最大の攘夷勢力であった長州藩へ打撃を与え下関・瀬戸内海の自由通行を確保すること、そして幕府の横浜鎖港方針を撤回させることにあつたとされる。

長州藩は、同年七月の禁門の変で大打撃をうけ危機的狀況にある中、下関戦争に直面した。戦争後藩内では保守派（俗論派）が政治的実権を握り、尊攘派（正義派）を弾圧、続く第一次幕長戦争では幕府への恭順を示した。しかし同年十二月、高杉晋作による功山寺決起を契機に藩内は内戦状態となり、結果保守派は政治的勢力を失い、元治二年（慶応元年）三月、藩内に抗幕政権が成立した。下関戦争は、幕末長州藩における大きな画期のひとつであった。

## 一 絵図の内容

(1) 各図の内容および文字情報

各絵図の大きさはいずれもほぼ  $27.5 \times 37.0$  cm、B4より一回り大きい。墨と朱で描かれる。内容を説明する文字情報も多数ある。文末に絵図と文字部分を翻刻した写真をならべて掲載した。<sup>(5)</sup>以下、各図について紹介する。なお、各図は時系列で並べ便宜的に図1〜10の番号を付した。

【図1】 上部に下関〜長府間の沿岸線、下部に西は筑前・

豊前境から東は企救半島東岸・柄杓田までの九州沿岸線、中央左に彦島、右に集結した四ヶ国艦隊を描く。日付はないが戦争直前の八月四日と考えられる。艦船は一八隻描かれるが、先行研究によれば軍艦は一七隻で、残る一隻は補給艦である。長州藩、小倉藩の砲台の位置も記されている。

【図2】 図中央右に「六月五日戦争之図」とあるが、書き（写し）誤りで、「八月五日」が正しい。図上部に前田砲台〜長府間の沿岸線、下部に九州の沿岸線（早瀬〜太刀の浦間）を描き、この海域でのこの日の艦隊の動きを線描する。左側に「戦争八月五日未下刻方始、申刻七歩二終ル」とあり、戦闘が未下刻（15時前後）に始まり、申七歩（17時前後）頃終わったと記す。先行研究によれば砲撃開始は16時頃とされるので、この記述は軍艦が動き始めた時期を指すと思われる。

本図の特徴は艦隊の動きが描かれる点である。砲撃開始に先立ち、一八隻のうち八隻（「い」と表記）が田ノ浦沖へ、さらに八隻（「ろ」と表記）が長府沖へ移動した動きを前者は墨で、後者は朱で線描する。長府沖に進んだ「ろ」の内二隻が前田砲台沖に進んだが、「無砲ニテ乗試」とあるように、この時は砲撃には至らなかった。そののち「い」「ろ」それぞれから二隻一組で交互に前田砲台沖に進み、砲台へ攻撃を加えている。二隻一組の攻撃は四回繰り返され、最終的

に絵図中央に集結したことが描かれる。

なおこの日、艦隊からの上陸部隊があつたが、その情報は絵図には記されていない。

【図3】 「六月六日戦争之図」とあるが、これも書き(写し)間違いで「八月」が正しい。下関戦争中もつとも激戦であつた六日の戦いを描く。

この日は卯上刻(5時前後)から砲撃が始まつたが、本図が描くのは巳上刻(9時前後)以降の戦闘である。同刻、四ヶ国軍艦から端船(上陸用舟艇、バッテリー)で陸戦隊が前田・壇ノ浦砲台へ上陸して戦闘となり、その後壇ノ浦の上陸部隊が未刻(13〜15時頃)に前田砲台へ移動、申刻(15〜17時頃)に制圧、その後角石陣屋へ進撃したことが記される。

また申刻には軍艦が下関・長府へ砲撃し火の手があつたことも描かれている。戦闘はこの日では大勢が決まる。

注目されるのは、九州側の「カサシ山」部分に「此山上ヨリ見取図」と記されていることで、この図がこの山上から戦争を監視していた人物により描かれたことがわかる。

【図4】 「八月七日戦争之図」とあるように七日の戦闘を描く。この日も端船で陸戦隊が前田砲台へ上陸した様子が描かれるとともに、彼らが砲台に残っていた諸物品を焼き払つたことが記される。端船の兵士が「流星ノ如クナルモノ打出」ともある。また、連合国軍艦が下関の長府藩米

蔵へ一五回砲撃したことも記されている。

なお、北九州の大津保に戦死した外国人兵士二人が埋葬されたという記載もある。<sup>6)</sup>

【図5】 「八月八日戦争之図」とあるように、八日の戦闘を描く。この日連合国軍艦は彦島を攻撃したが、図5はそのうち午前中の攻撃を説明する。卯中刻(7時頃)、四隻の軍艦が彦島砲台を攻撃した。ここでも二隻一組で砲撃を繰り返し、辰下刻(9時頃)攻撃が終了した。攻撃は「いつも着発いたし候へとも焼上りハ無之、又海中江落込もアリ」とあり、着弾後炎上するような事態ではなかった。

巳上刻(9〜10時頃)に彦島本村へ向け五〜六発の砲撃があつたことも記されている。

【図6】 日付はないが、八日午前から午後にかけての彦島への攻撃を描いたものである。巳中刻(10時前後)、軍艦四隻が彦島砲台前に進み砲撃を行った。四隻の軍艦が図右側から左側へと移動した経路が線描される。軍艦には「い」「は」「に」「ほ」の記号が付され、どの艦がどこに移動したのかもわかる。未上刻(13〜14時頃)、彦島の三軒家の山

手がオランダ船の攻撃で炎上したこと、申上刻(15〜16時頃)、砲撃により彦島の陣屋が炎上したことが説明されている。各軍艦につき、「砲門十六」「砲門十八」「砲門不分」など砲数も注記される。

【図7】 日付はないが、図5・6同様、八日の戦闘を描いた図で、下関市街を砲撃するフランス軍艦を描く。艦船上にはフランス国旗がみえる。午上刻（11〜12時頃）から下関市街に向け繰り返し砲撃があったが、着弾後の火災は発生しなかったと記す。また、端船での陸戦隊上陸も描かれる。火の山裏手で陸戦隊による戦闘があり、辰中刻（8時頃）から銃声が聞こえ、未上刻（13時頃）に砲声が止んだと記す。

【図8】 この図も日付はないが八日の動向を描く。右側に砲撃する四隻の軍艦、左側に帆船が描かれている。この日、彦島の三軒家に碇泊していた民間の帆船が出港したところ、イギリス船から攻撃を受けた様子を描いたものである。図では四隻とも砲撃しているが、左側の注記には「英船ヨリ砲発」とのみある。幸いに帆船に着弾はしなかったものの船近くに砲弾が落ちたという。

【図9】 「八月九日戦争之図」とあり、九日の戦況を描いた図である。上部左に彦島、右に下関市街、下部に北九州を描き、海域中央には五隻の軍艦を描く。このうち「ろ」が付された一隻は、右端に描かれた「ろ」の軍艦が移動してこの位置に碇泊したことを著している。各軍艦には、国籍を表す「エ（イギリス）」「ラ（オランダ）」「フ（フランス）」の文字も記される。

この日の已上刻（9時頃）、端船で陸戦隊が彦島に上陸し

砲台に残る物品を焼却したこと、辰中刻（8時頃）彦島の山中村で火の手が上がり、銃声が聞こえたが、本格的な戦闘が発生したわけではないことなどが記される。

【図10】 この図も「八月九日戦争之図」とある。上部、本州側は八軒家・壇ノ浦から長府、さらには吉田、「カジ（王司の誤りか）」「ハフ（殖生）」までが描かれている。海域に一二隻の軍艦が碇泊しているようすが描かれる。軍事行動としては、黒門周辺に連合国兵士が上陸したことが記される。また、北九州側の大津保に八日、外国人戦死者八名が埋葬されたことも記されている。

北九州側、早瀬の箇所には「此所方見取之図」とあり、ここでもやはり九州側から監視した内容を描いたものであることがわかる。

## (2) 一〇枚の絵図の特徴、史料的价值

これら絵図の特徴、史料的价值については、まず以下の三点を指摘したい。

ア下関戦争を北九州側から見ていた（監視していた）人物が作成した絵図であること

イ戦争の推移、特に連合国の軍艦や兵士の動きをビジュアルな形で詳細に記録したものであること

ウ絵図の枚数が多く、八月四日〜九日の状況が連続して描かれていること



アは絵図に注記があり、作成者が九州側の山に登り戦争を監視していたことは明らかである。時間的にも朝早くから夕方までしつかりと戦争を見届けている。イ・ウは、下関戦争関係史料の中でも特に特徴的な点といえる。戦争の一場面を切り取るのではなく、複数の絵図が作成され、戦況の推移、状況の変化が詳しくわかる。連合国軍艦や兵隊の動きが詳しく記されるのは、欧米の戦争のやり方、軍艦や兵士による攻撃の仕方を具体的に記録しておきたいという考えによるであろう。もちろん、長州側の動きや下関での被害状況などについても記録されている。

## 二 絵図作成の背景および作成者

この絵図が作成された背景、および絵図の作成者について検討したい。

前述のように、絵図が綴じられた「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書并絵図面共」には多くの文書、記録が収録されている(内容は表参照)。小倉藩家老から同藩長崎開役へ宛てた書状(1・4・5)、および作成・宛先は欠くが下関戦争の状況を伝える2・3・7の文書は、小倉藩が長崎奉行所へ下関戦争の概況を報告したものである。10は小倉の有力商人・中原屋嘉兵衛が津田喜三右衛門・諸熊祐之助(長崎奉行所の役人か)に宛てた書状で、これも戦争のよう

幕末期の下関戦争を描いた一〇枚の絵図(山崎)

表 「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書并絵図面共」の収録内容一覧

№	文書名(仮題)	日付	差出人	宛先
1	小倉藩家老連署書状	8月6日	小笠原出雲・小笠原内匠・小宮民部(小倉藩家老)	平林勘助(小倉藩長崎開役)
2	八月五日戦争始末上申書	8月5日夜	—	—
3	八月六日戦争始末上申書	8月6日午上刻	—	—
4	小倉藩家老連署書状	8月10日	小笠原出雲・小笠原内匠・小宮民部(小倉藩家老)	平林勘助(小倉藩長崎開役)
5	小倉藩家老連署書状	8月10日	小笠原出雲・小笠原内匠・小宮民部(小倉藩家老)	平林勘助(小倉藩長崎開役)
6	小倉藩士鎌田六左衛門書状	8月9日	鎌田六左衛門	平林勘助(小倉藩長崎開役)
7	小倉藩士仏船通辞と相対の件書上	8月10日	—	—
8	下関戦争見聞書	8月5~11日	—	—
9	小倉表より書状	8月7日申刻	小倉より	—
10	中原屋嘉兵衛(小倉の有力商人)書状	8月10日	—	津田喜三右衛門・諸熊祐之助
11	小倉表より書状	8月5日未上刻	小倉より	—
12	松平大膳太夫講和書	8月9日	松平大膳太夫	合衆国水師提督

すを伝える。

絵図との関係で特に注目したのが8である。全三五丁からなり、「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書并絵図面共」の大半を占める。作成者や提出先に関する記載はない。八月四日から十一日までの下関戦争の状況を克明に報告する内容で、四ヶ国軍艦および陸戦隊の動き、長州藩兵の動き、講和交渉の状況を記すほか、小倉藩および九州

諸藩（福岡藩・平戸藩等）の動きなどが記される。明らかに実際に現地で見、情報を集めた人物が記述したものである。題名は記されていないので、仮に「下関戦争見聞書」としておく。

この「下関戦争見聞書」には、一〇枚の絵図と一体の内容であることを示す記述がみえる。例えば次のようである。

一八月六日戦争、小倉城下より北方に当り候内裡（大里）後手カサシ山に登り、匏絵図面の通見取申候、尤右山麓より山上迄一里の登りにて戦場は眼下に見え申候

小倉城下の北方、大里の後手の「カサシ山」に登り、海峽での戦闘の様子を見、「匏絵図面」のように記したとある。先述のように、六日の戦況を描く【図6】には「カサシ山」の地名と「此山上ヨリ見取之図」との注記がある。

同様の例をもうひとつあげる。

一八月九日戦争無御座、小倉城下より壱里半内裡（大里）より見取候図の通り、英仏蘭の軍艦彦島砲台前海へ碇泊、辰の上刻頃、右三隻の歩兵端船より凡百五拾人計り彦島へ上陸（下略）

九日に彦島へ英仏蘭軍艦の陸戦隊が上陸した状況については、大里から見た様子を描いた図（見取候図）のとおりであると記すが、これは【図9】に「内裡 此所方見取図」とあることに対応する。以上の例から、一〇枚の絵図は「下関戦争見聞書」と一体のもの、同書に添付された絵図であ

ったことは確実である。ではこの作成者は誰なのか。

この解答を得る史料が、幕末期会津藩の藩庁記録「公武御達控」の中にある<sup>9)</sup>。周知のように会津藩主松平容保は文久二年（一八六二）京都守護職に就任し、以後、幕末政局の中心地京都を管轄する重要任務を負う。このため、この時期に幕府中枢の一員として収受した文書が会津藩に残り、それらが「公武御達控」に控えられている。

このなかに、元治元年八月二十五日、大坂城代松平信古が幕府老中稲葉正邦、京都守護職松平容保、京都所司代松平定敬に宛てた書状が残る。下関戦争後、参戦したフランス軍艦一隻が長崎に来港したことから、長崎奉行所がその意図や今後の動向につき尋問したこと、また、その後長崎奉行所が船を下関方面に派遣し、まだ碇泊中であつた各国軍艦へ尋問したことなどを伝える内容である。長崎奉行所は、下関戦争後、各国が大坂表へ艦隊を進めることを恐れていたようである。

松平信古はこの書状にあわせて、「長州戦争始末風聞書図面」および「小笠原大膳大夫家来方長崎奉行へ届出候書類」ならびに「仏人長崎港入津長門守対話書」などの資料を送付している。注目すべきは「長州戦争始末風聞書図面」で、その具体的中身も「公武御達控」に記録されている（絵図は未収録<sup>1)</sup>。実は本稿で「下関戦争見聞書」と仮題を付けたも

のは、「公武御達控」に収録された「長州戦争始末風聞書」と内容がほぼ同一である。

「長州戦争始末風聞書」は、下関戦争の戦況を報告するため八月五日から十一日までに提出された9点の文書（報告書）で構成されている。概略を以下に示す（①～⑨は便宜的に付したものである）。

① 長州戦争始末風聞書 絵図面ハ絵図袋へ入置

一先達而中、筑前国若松詰之内家土小倉家へ使者来り、此度長州へ異船襲来も有之候ハ、他ニハ格別応援ハ相聞候ニ付、小倉領海之内白木崎を借受度談有之（略）

（三ヶ条略）

右探索仕廉々御内密申上候 以上

子八月五日

②

一長州へ異船襲来之儀、日々相待居候処、当八月三日豊後国姫島沖手へ異艦三隻相見、右ハ類船待合候由（略）

（二ヶ条略）

右者兵端を開候後委細申上候心得ニ御座候へ共、次第二延引相成候ニ付、先異艦襲来之次第、小倉藩土応援之模様申上候、猶以後相変儀次第可申上候、以上

子八月

（③～⑤文書略）

幕末期の下関戦争を描いた一〇枚の絵図（山崎）

⑥ 八月七日戦争別紙絵図面之手続左ニ申上候

一 小倉領大津保前海へ船繋り居候申船方八軒家脇手長府藩米蔵へ向け屢砲発凡十五発も打込ミ候得共（略）

（三ヶ条略）

右七日戦争之始末ニ御座候

⑦ 八月八日戦争見取別紙絵図面之手続左ニ申上候

一 小倉城下方行程壱里内裡住吉と申所ニ而見取候節、英仏蘭之軍艦岸流島近海へ並び船繋居（略）

（三ヶ条略）

右八日戦争之始末ニ御座候

⑧ 一 八月九日戦争無之、小倉城下方壱里半内裡方見取図之通英

仏蘭之軍艦彦島砲台前へ碇泊（略）

（一〇ヶ条略）

右者別紙絵図三通之手続書ニ御座候、以上

⑨

一 今十一日未上刻比長州襲来之異艦之内仏軍艦壱隻小倉前海下手江乗参り申候、自然崎港ニ入船致し候哉難計奉存候

（一ヶ条略）

右探索仕候廉々申上候、以上

子八月十一日

（以下、下げ札部分略）

「長州戦争始末風聞書」を構成する九点の文書は、下関戦争の概況、小倉藩など九州諸藩の動向などを見聞きし、「探

「素」した内容を日々報告する（原形はおそらく一紙形態）。差出人、宛先の記載はないが、これらが最終的に大坂城代から幕府中枢に提出されたことを踏まえれば、作成者は、下関戦争を監視し、「探索」する任務を帯びて幕府から派遣された人物（以下「探索人」とする）であったと判断できる。派遣命令を下したのは長崎奉行所、あるいはその上級役所にあたる大坂城代であろう。

「長州下ノ関ニ於テ仏英亞蘭戦争之始末書并絵図面共」に収録される「下関戦争見聞書」は、この「長州戦争始末風聞書」①②③とほぼ同内容である。ただし①②③各文書の奥書部分および日付（史料傍線部）は省略されている。また、書き写される順番も②③④①⑤⑥⑦⑧となっている。残念ながら「公武御達控」には、「長州戦争始末風聞書」に添付された絵図は書き写されていない（絵図面ハ絵図袋へ入置」とある）。しかし、「下関戦争見聞書」と「長州戦争始末風聞書」の類似性から考えて、本稿で検討する一〇枚の絵図は、本来「長州戦争始末風聞書」に添付された絵図、すなわち、下関戦争を監視するため幕府から派遣された「探索人」が、報告書（「長州戦争始末風聞書」とともに作成した絵図、それを書き写したものであったと理解できる。<sup>12)</sup>

これら報告書と絵図は、下関戦争の一日後、大坂城代を通じ老中・京都守護職・京都所司代など幕府中枢に提出

された。詳細な報告書および戦争を描いた一〇枚の絵図は、幕府中枢が下関戦争の結果、戦争のリアルを理解する上で貴重な資料となり得たであろう。

先に、この一〇枚の絵図の特徴、史料的价值について3点を指摘したが、それに追加して、

エ下関戦争監視のため幕府が派遣した「探索人」が作成した報告書とセットになった絵図の写しであること  
 才後年の回想ではなく、ほぼリアルタイムで描かれた実況報告的な絵図であること

力絵図は報告書とともに戦後ほどなく幕府中枢に提出され、彼らの下関戦争に対する認識（欧米諸国の軍事力の強大さなど）を深める資料となったと考えられること  
 という点も挙げたい。

### 三 なぜこの史料が毛利家文庫に残されたのか

「長州下ノ関ニ於テ仏英亞蘭戦争之始末書并絵図面共」の表紙には貼付された掛紙がある。これには「平山成信ヨリ譲受、明治四十二年七月六日」とあり、「杉孫七郎」の丸印も押されている（写真）。表紙掛紙および「毛利家文庫」所蔵印から、本史料が明治四十二年七月、平山成信から杉孫七郎に譲渡され、そのち毛利家文庫として伝来したことがわかる（杉は毛利家へ寄贈したのである）。

平山成信は

幕臣平山省齋の養嗣子で、明治政府の官僚として活躍したのち、明治二十七年（一八九



表紙の掛紙と毛利家文庫所蔵印

四）貴族院議員、同四十一年（一九〇八）に宮中顧問官兼別当となり、大正八年（一九一九）から昭和四年（一九二九）まで枢密院顧問を務めた。一方、元長州藩士の杉孫七郎は、明治三年（一八七〇）山口藩権大参事、廃藩後は中央で宮中官僚、政治家として活躍、明治三十年（一八九七）から大正九年（一九二〇）に枢密院顧問官を務めた（吉川弘文館『国史大辞典』。近代毛利家の家政にも深く関わる。

平山と杉の親交関係の詳細は不明だが、少なくとも明治四十二年時点、両者は宮中顧問官兼別当と枢密院顧問官として宮中でのつながりを持つ。周知のように、明治期の毛利家は東京で修史事業を継続して行っている。平山は、「自分分は下関戦争に関する史料を所蔵していますが、毛利家の修史事業のお役に立つなら寄贈しますよ」と杉に申し出たのではないかと推測される。

それではなぜ、平山は「長州下ノ関ニ於テ英亞蘭戦争

幕末期の下関戦争を描いた一〇枚の絵図（山崎）

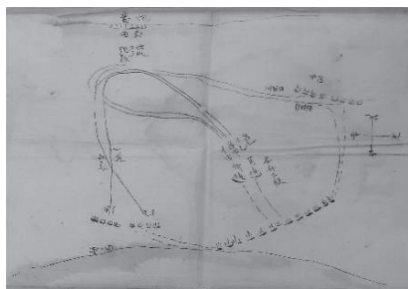


図 a (58 絵図 888 所収)

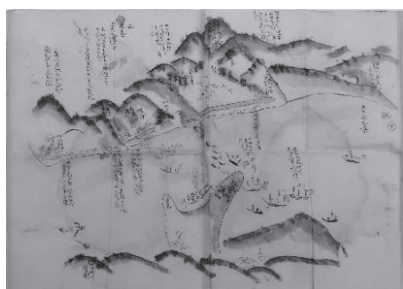


図 b (58 絵図 888 所収)

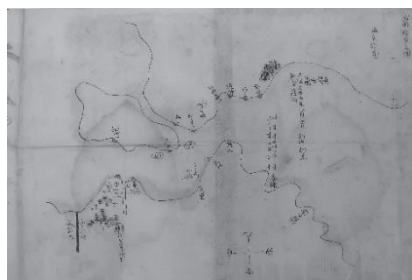


図 c (58 絵図 888 所収)



図 d 下関戦争図（萩博物館蔵）

之始末書并絵図面共」を所蔵していたのか。この点を考える前提として、まず、一〇枚の絵図とよく似た構図の絵図が他にも残る点に注目したい。

毛利家文庫58絵図888「馬関戦争之図」は、文字通り下関戦争に関する絵図が継ぎ立てられている史料だが、その中に図a・b・cが含まれる。これらの構図は、本稿で対象とした図2・図3・図1とほぼ同じである。ただし、外国軍艦の描き方を図3と図bで比べると図bが丁寧である。図a〜cに記入されている文字情報は図1〜3のものに近いが、まったくの同文ではない。

図dは萩博物館が所蔵する「下関戦争図」である。（田中家寄贈と説明される）。この図も図3と構図が類似する。記入された文字情報は図3のものに近いがまったく同じではない。軍艦の描き方はやはりこちらが丁寧である。

これらの事例から、幕府中枢に提出された「長州戦争始末風聞書」と絵図は、そののちさまざまルートで書き写され伝播した可能性が考えられる。下関戦争の現実（欧米軍事力の強大さ、長州藩の敗北）は、リアルな絵図とともに各地へなまなましく伝えられたのではなからうか。

その上で注目すべきは成信の父省齋の経歴である。省齋は幕末期、幕臣として幕府の外交業務に深く携わった人物である。安政元年（一八五四）のペリー再来航時、下田応接

の一員となるなど安政期の外交実務に関わり、一時閑職となるも、文久二年（一八六二）十月には函館奉行支配組頭として外交交渉の場に復帰、慶応期には外国奉行、若年寄並・外国総奉行兼帯となる。明治元年四月、家督を成信に譲って隠居し、徳川慶喜に従い静岡に移住したが、のち東京に戻る。以後省齋は神道家として活躍し、明治十二年に神道大成教を創設する。明治二十三年七六才で死去した。<sup>(13)</sup>

省齋が幕末期の幕府外交業務に深く携わった人物であるとすれば、その在任中、大坂城代から幕府中枢に提出された「長州戦争始末風聞書」と添付された絵図、さらには「小笠原大膳大夫家来方長崎奉行へ届出候書類」などを目にし、<sup>(14)</sup>その写本を手に入れる機会があったことは十分考えられる。成信が杉に譲渡した「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書并絵図面共」とは、そのようにして省齋が入手し、幕府倒壊後、明治期にはそのままひっそり平山家に残されていた文書であつた可能性を推測してみた。

### おわりに

「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書并絵図面共」に綴じられた一〇枚の絵図は、下関戦争を監視するため幕府から現地に派遣された「探索人」が描き、報告書である「長州戦争始末風聞書」に添付した絵図、その写しと理解



できる。絵図は「長州戦争始末風聞書」とともに、大坂城代を通じて老中や京都守護職・京都所司代など幕府中枢に提出され、戦争の現実を生々しく伝える資料となったと考えられる。

ところで、下関戦争を描いた絵図としては、戦争に従軍した長府藩の藤島常興が後年実歴談に基づき描いた「馬関戦争図」(下関市立歴史博物館蔵)が引用されることが多い。この図には、砲撃により外国軍艦へ損害を与えた様子が描かれる(実際二隻に打撃を与えている)。軍事力格差がありながらも勇敢に戦い、あまつさえ打撃を与えた誇らしい過去、戦功が強調された絵、といえる。

「長州戦争始末風聞書」および添付絵図にはこれに関する記載はない。たまたま目撃していなかったのか、目にはしていたものの意図的に報告しなかったのかは不明である。一方で「長州戦争始末風聞書」には次のような記述がある。

一戦争中長州より打出し候弾丸は兎角高く、異船の分は低き由、且長州砲台より打出候玉二発の間に異船よりは十発も打出し候由に御座候

ここでは長州藩の大砲と欧米軍艦の大砲では、その弾道および発射速度に違いがあることが記され、両軍の軍事力格差が強調されている。

さらに、激戦であった八月六日の状況についてつぎのよ

うにある。

一カサシ山より赤間ヶ関見渡候へは、浜手商家数千軒有之候処、寂寞として一人も往来の者無御座、既に八軒家へ火を掛け候得共、防ぎ候者も無之、夜に相成候ても灯火も相見不申候、誠に憐に被存候

攻撃を受けた下関は「寂寞」として一人の往来もなく、火の手があがっても消火する者もおらず、夜は灯火も見えず、まことに憐れむような(悲しくなるような)状況という。第三者の目からは、日頃の活気あるようすと比べ、戦争下の下関はこのように見えた。欧米諸国と戦火を交えるとはどういうことなのか、その現実を伝える。

後年描かれた「馬関戦争図」に対し、幕府「探索人」により実況報告的に記された「長州戦争始末風聞書」および一〇枚の絵図とでは、下関戦争の描かれ方は異なる。もちろん、後者でも情報の取捨選択があったことは意識する必要がある。言うまでもないことだが、他の史料と突き合わせながら「長州戦争始末風聞書」および一〇枚の絵図を読み解き、立体的に下関戦争を理解することが重要であろう。



註

(1) そのほか、田口由香『海外から見た幕末長州藩—イギリスから見た長州戦争—』（萩ものがたり Vol. 60 二〇一八年）でも一部が使用されている。

(2) 第12回中国四国地区アーカイブズウィーク・アーカイブズ歴史小話「九州から眺めた元治元年下関戦争の図」。なお『欧米史料による下関戦争の総合研究』研究報告書（研究代表者保谷徹 二〇〇一年三月）でも報告されているが、「主として小倉側の情報をまとめたもの」と説明されている。

(3) 保谷徹『幕末日本の対外戦争の危機 下関戦争の舞台裏』（吉川弘文館 二〇一〇年）、田口前掲註1。このほか下関戦争

に関しては、古川薫『幕末長州藩の攘夷戦争』（中公新書 一九九六年）、『下関市史・藩制—市制施行』（下関市 二〇〇九年）、『山口県史 史料編 幕末維新7』の第4部解説（保谷徹執筆 二〇一四年）、『山口県史 通史編 幕末維新』第7章「下関戦争と講和会議」（田口由香執筆 二〇一九年）。史料集としては、中本静暁編訳『1963年と1964年におけるメデューサ号館長の下関戦争』（カン・ペレ文庫 二〇一六年）もある。

(4) 三宅紹宣『幕末維新の政治過程』（吉川弘文館 二〇二一年）。

(5) 絵図の文字情報については基本的に同一場所に釈文を示すようにしたが、長文の場合などには、元の位置に「釈文①」と記し、別の位置に釈文を「①・・・」と示した場合がある。

(6) 下関戦争で戦死した仏水兵の慰霊碑が北九州市の和布刈神社の近く、市立ブルー駐車場側の高台に立つ。明治二十八年（一八九五）ピリオン神父が最初に石碑を建立し、のち数回場所を替え現在地に移設されたという。ピリオン神父は「山口古図」を「発見」した人物としても知られる。

(7) 下関文書館編『資料 幕末馬関戦争』（三書房 一九七一

年）収録「長州下関に於る英米仏蘭戦争始末書」がこれとほぼ同内容である。解説には「長府図書館蔵の写本」とある。ただし、誤字脱字があり正確な意味が取り難い部分がある。

(8) 元治元年八月二十五日に大坂城代から老中らに送付された資料の一つ「小笠原大膳大夫家来方差出候書面写」（小笠原大膳大夫家来方長崎奉行へ届出候書類）の内容がこれらにほぼ一致する。日本史籍協会叢書『会津藩庁記録五』（東京大学出版会 一九八二年再版）<sup>696</sup>～<sup>711</sup>頁。

(9) 『会津藩庁記録』収録史料。

(10) 『会津藩庁記録五』<sup>1689</sup>頁。

(11) 『会津藩庁記録五』<sup>661</sup>～<sup>688</sup>頁。

(12) 大坂城代松平信古が老中らに送付した資料につき絵図は「絵図面九枚」とある。あるいは一〇枚の絵図のうちいずれか一枚は経緯を異にした可能性もある。

(13) 吉川弘文館『国史大辞典』および鎌田東二『平山省齋と明治の神道』（春秋社 二〇〇二年）を参照した。

(14) 戦争月の写し間違いという初歩的な間違いもあり、書き写しが省齋自身であったかと言えれば疑問も残る。

(15) 『旧臣列伝—下関の幕末維新』（下関市立長府博物館 二〇〇四年）。なお、『山口県史 史料編 幕末維新7』の口絵写真でも使用されている。

幕末期の下関戦争を描いた一〇枚の絵図（山崎）

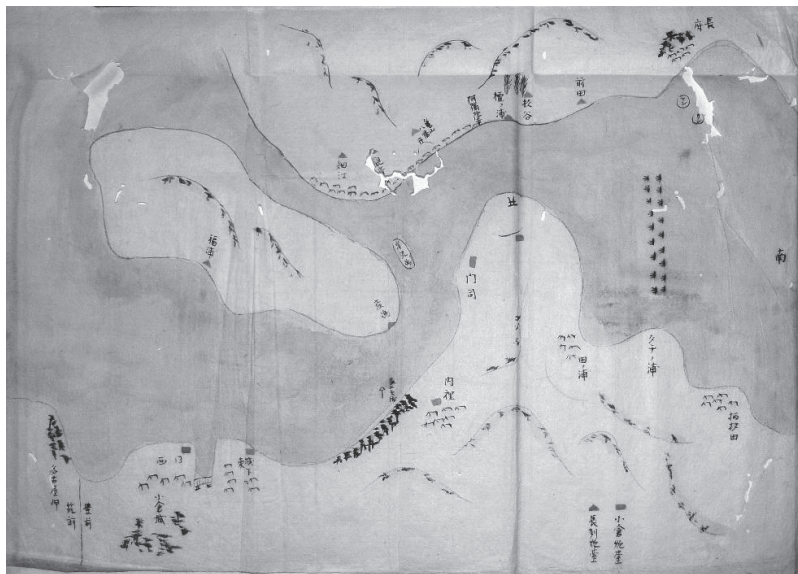
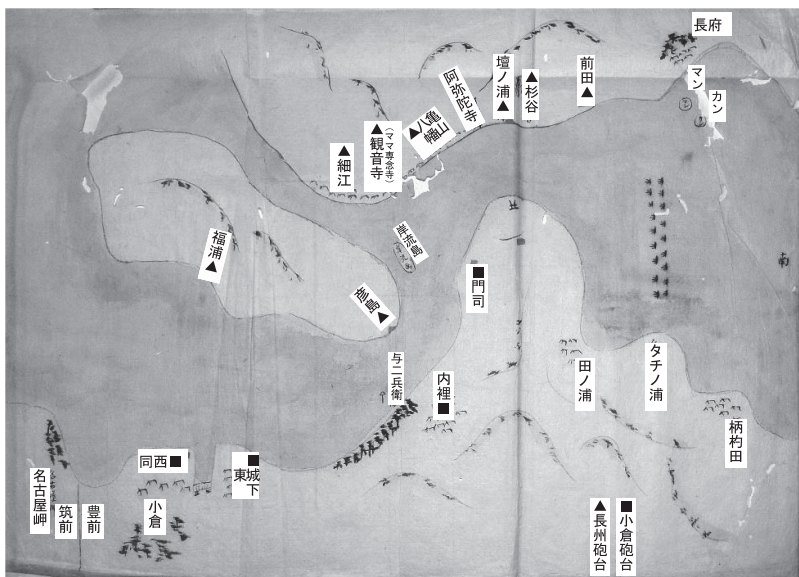


図 1



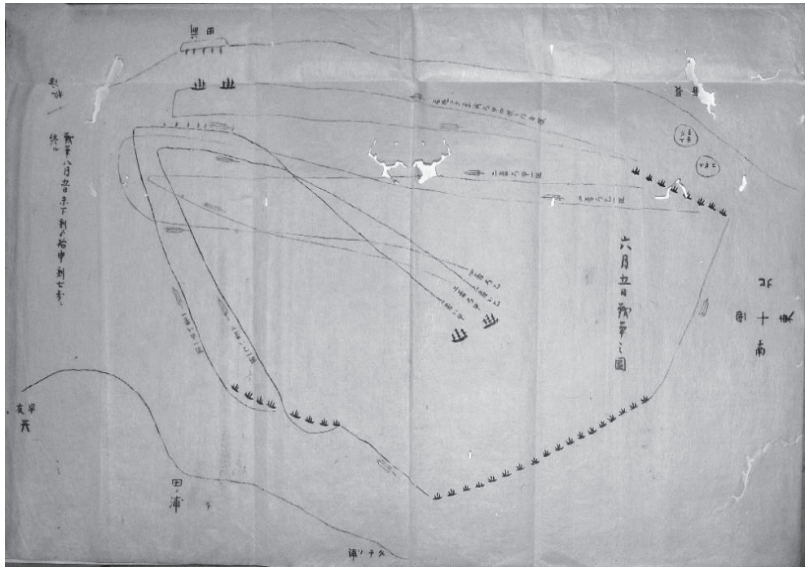
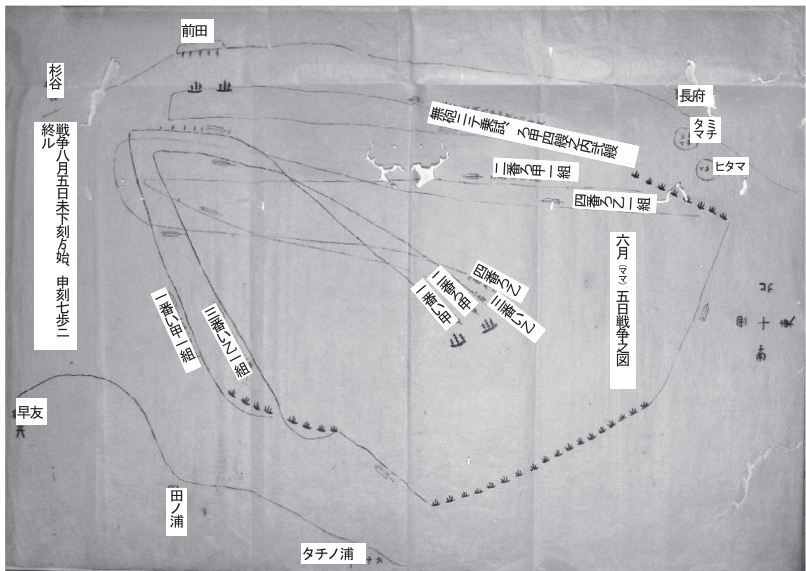


図2



幕末期の下関戦争を描いた一〇枚の絵図（山崎）





幕末期の下関戦争を描いた一〇枚の絵図（山崎）

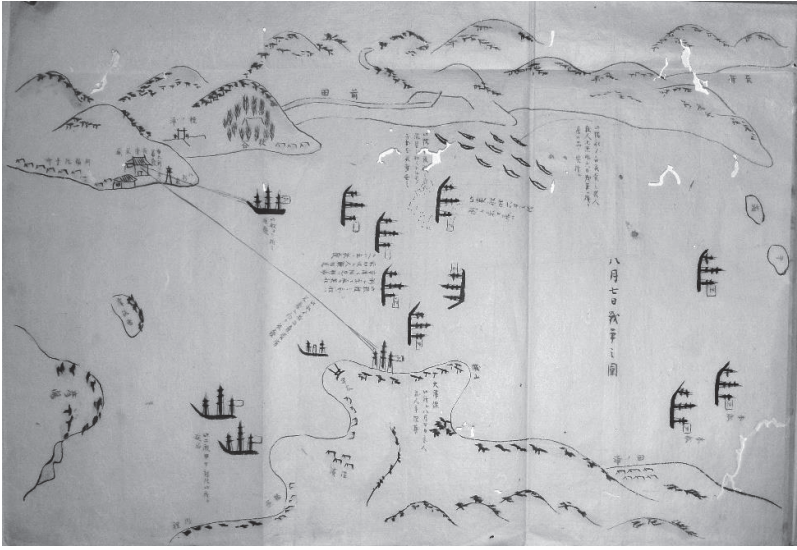
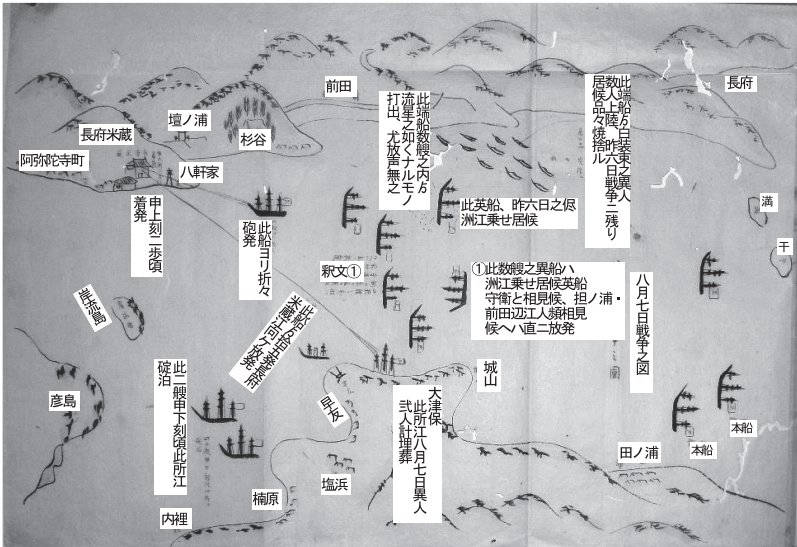


図4



四四







幕末期の下関戦争を描いた二〇枚の絵図（山崎）

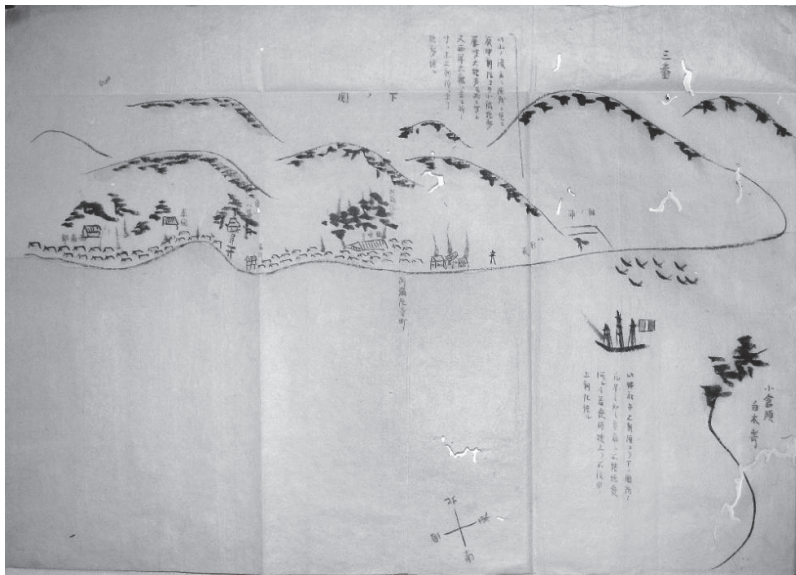
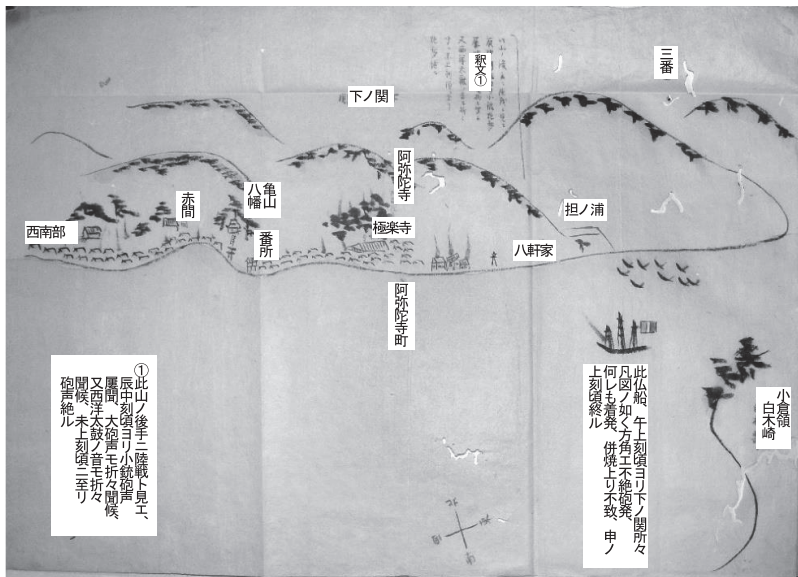
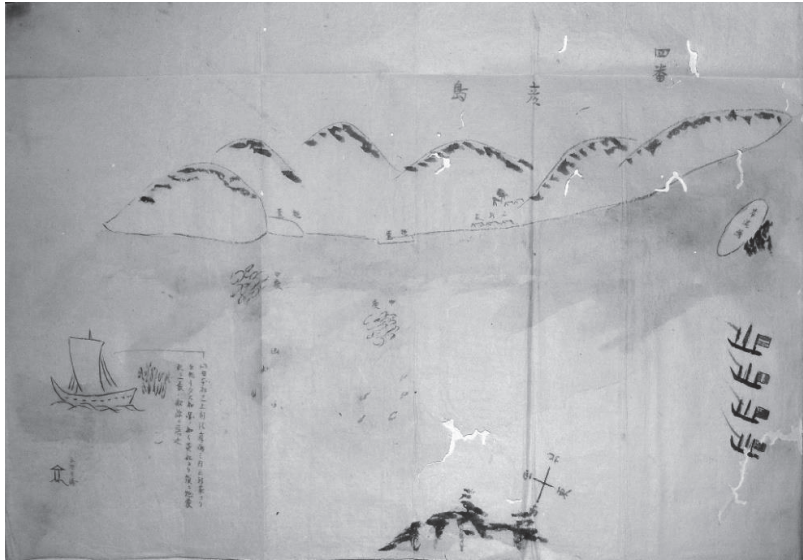


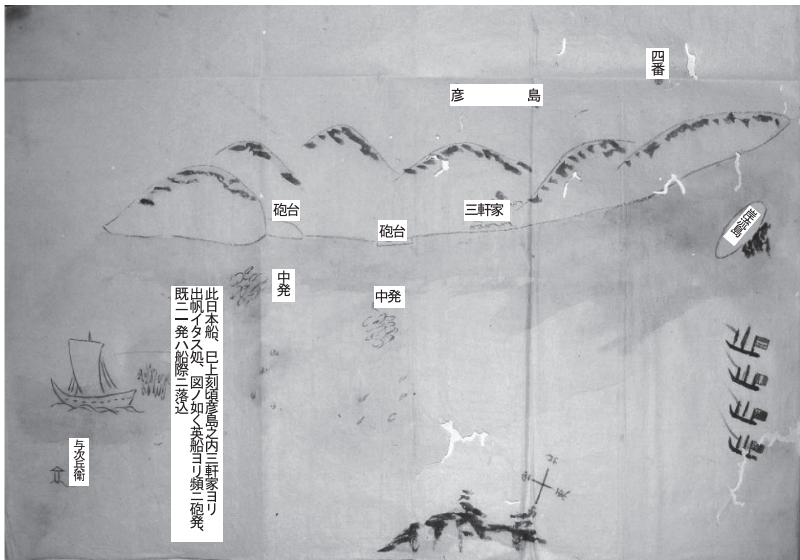
図 7





幕末期の下関戦争を描いた一〇枚の絵図（山崎）

図8



幕末期の下関戦争を描いた一〇枚の絵図（山崎）

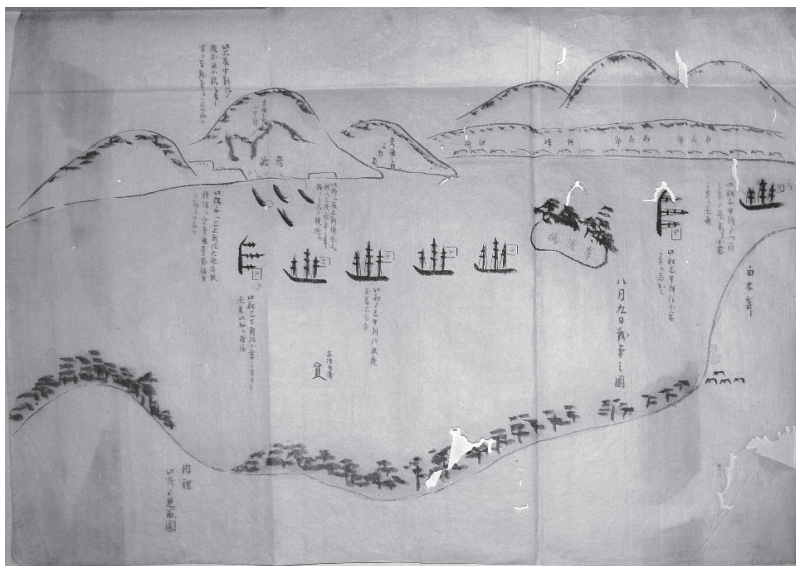
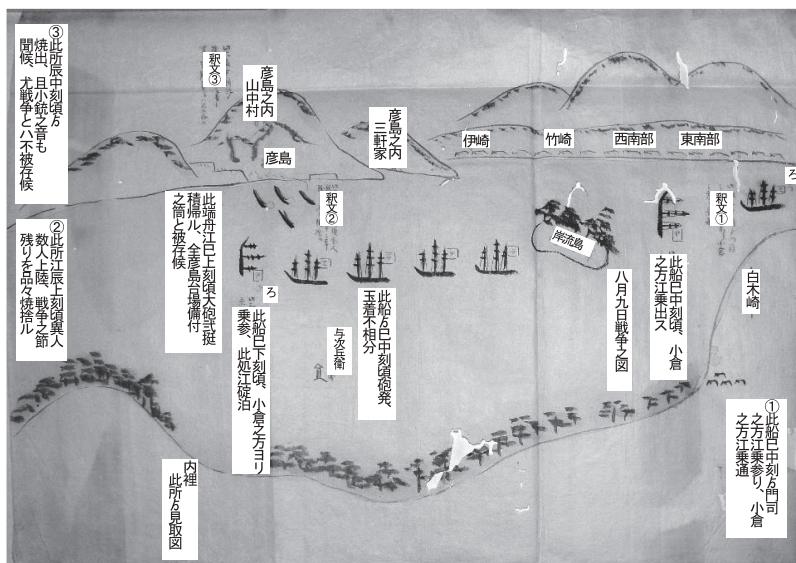


図9





幕末期の下関戦争を描いた一〇枚の絵図（山崎）

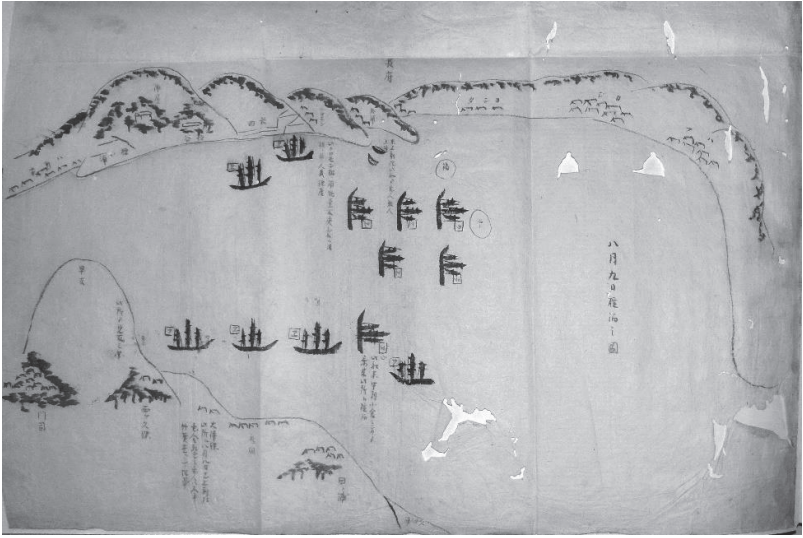
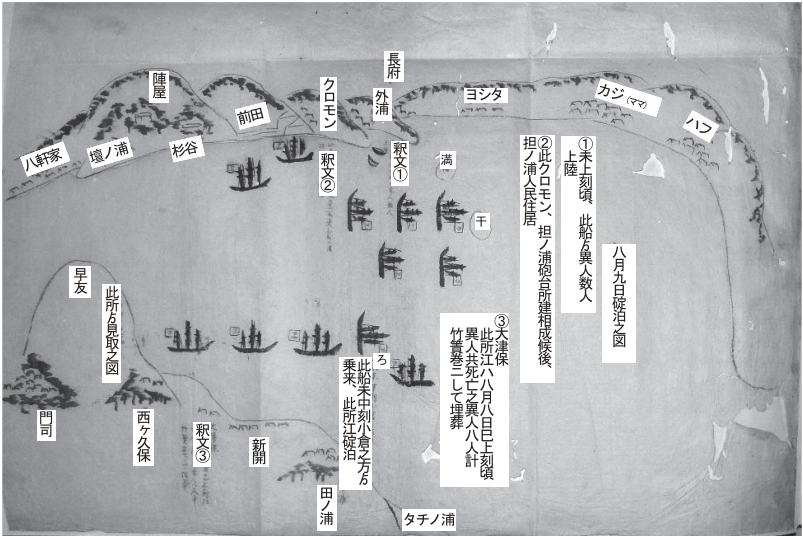


図10



五〇